

## 臨床心理士養成における脳神経科学の基礎教育

特別支援教育講座・山下 光

### (1) 授業の概要

この授業は、従来特別支援教育専攻の特別支援学校教育専修で言語聴覚士国家試験の受験を目指す学生が、神経系の解剖生理学と神経心理学の基礎を学ぶために開講されていたものである。その後、言語聴覚士養成が停止されたため、その位置づけを変更する必要が生じていたところ、授業担当者が今年度より臨床心理学コースに所属変更（兼任）となったため、主に臨床心理学コースの学生を対象とした授業として開講されることになった。そこで、臨床心理士として発達障害、高次脳機能障害、認知症などの器質性障害を正しく理解し、適切な評価・介入を行うことが出来るようになるために必要な脳神経系の基礎知識を学ぶことを目的として、授業内容を再構成した。

### (2) 実際の授業の展開

当初予定していた単元を以下に示す

履修を登録した学生は7名で、全員が臨床心理学コースであった。

1. 脳と行動の関係
2. 脳と知覚Ⅰ（視覚）
3. 脳と知覚Ⅱ（聴覚）
4. 脳と運動
5. 脳と記憶
6. 視覚認知の障害
7. 聴覚認知の障害
8. 聴覚・言語の障害Ⅰ（話し言葉）
9. 聴覚・言語の障害Ⅱ（読み書き）
10. 感覚代行技術と脳
11. 模倣、身振り、他者理解、手話と脳
12. 重複障害と脳
14. 実行機能と自己意識の障害
15. まとめ

しかし、実際に授業を開始すると様々な問題が生じた。まず、予備知識に非常に大きな個人差があった。特別支援教育専攻の学生の場合は、学部で障害児医学に関する授業を履修した上に、医学部で解剖生理学、臨床神経学などの単位を取得した受講生がほとんどだったので、最低限の基礎知識を持っていることを前提に授業を進めること

が可能だった。しかし、臨床心理学コースの学生は精神医学以外の医学系科目を履修した者が少なかったため、第1回の授業の終了時に学生の方から内容が難しいという指摘があった。そこで、2回目からは授業開始時に、口頭でクイズ形式の質問をして、その日予定している単元の解剖生理学の基礎に関する予備知識を確認し、必要に応じて補習的な解説を行った。

しかし、そのために医学系の高額の教科書を購入させることにも問題があるため、教員が常に複数の参考書を携行し、必要に応じて供覧した。また、多数の関連動画を収集し、積極的に活用した。

### (3) 時間外学習の促進

解剖生理に関する基礎知識に関しては、穴埋め式のプリントと、参考図書のリストを配布した。また、図書館にない参考図書に関しては、教員の私物の貸し出しを行った。

### (4) 授業評価

授業最終日に、自由記述方式のアンケートを行った。「高次脳機能障害や認知症については初めて勉強した」、「動画があったので理解しやすかった」等の好意的な意見もあったが、「資料が多くて整理が大変だった」、「あまり興味がわかなかった」という意見もあった。また、「解剖図や手術の動画が苦手で、見るのがつらい」という学生もいて、それに対しては配慮が足りなかった。

### (5) 反省点と総括

今年度は対象学生が変わって1年目の授業であったため、まだ改善の余地が多いと感じた。また、他の教員が担当する科目との内容の重複についても調査が必要である。来年度は、You Tube等の公開動画を使用した反転授業を一部取り入れたいと考えている（そうすれば、見たくない学生は見なくてもよくなる）。

### (6) 地域社会とのつながり

県内の障害者の家族会を扱った動画を見た学生から、実際にその会に参加して当事者や家族の実態を知りたいという希望があった。家族会もボランティアを募集していることから、双方にとって意味のある交流の方法を検討中である。